

図書館報

聖隷クリストファー大学

第3号

2005.3

- ・未来をつくる図書館（大場浩） ……1～2
- ・図書館の記憶（佐々木敏明） ……2～3
- ・沖縄暮らしを偲ぶ（伊藤幸子） ……3～4
- ・マックスウェルの悪魔（多羅尾範郎） ……5
- ・図書館でのひととき（片山京子） ……6
- ・所蔵文献目録 ……7
- ・利用頻度統計 ……7～8
- ・教職員寄贈図書 ……8
- ・お知らせ ……8

未来をつくる図書館

図書館長 大場 浩

夢がふくらみそうなタイトルだが、実は、今年の正月休み、ふらっと入ったとある本屋で「未来をつくる図書館」—ニューヨークからの報告—という岩波新書のタイトルから拝借したものである。著者は、ジャーナリストの菅谷明子氏。面白そうな内容なので、さっそく買って読んでみた。内容は、ニューヨーク公共図書館の紹介である。公共図書館というから、ニューヨーク市が建てたものかと思っていたが、本の中の説明で前身は19世紀の個人図書館であることがわかった。以下この本の紹介をする。

序章は、夢をかなえた人々で始まり、第一章、新しいビジネスを芽吹かせる、第二章、芸術を支え、育てる、第三章では、市民と地域の活力源、などの興味深い項目が並び、最後は、日本の図書館を「進化」させるために、で結んでいる。

まず、興味を引いた箇所は第三章の図書館が市民と地域の活力源になっている箇所、とりわけ、医療情報へのニーズがここ数年最も高く、その情報収集に図書館が大きな役割を果たしていることをあげている。1998年には「コミュニティ健康情報センター」をたちあげ、地域の人々にありとあらゆる健康情報を提供する情報発信の中心的役割を持つに至っている。さら

に、未来を担う子供を地域で育てるということで、日本と同様に読書離れの加速していることもあり、就学前の子供達には本の楽しさを、学校に通う子供達には、新たな興味を引き出し、本や資料を活用した学習方法を身につけてもらう活動を実施している。不登校の子供達のために児童室を設け、子供の学ぶ力や読書を愛する心を創造的で楽しい環境のもとに育むことを、積極的におしすすめてきている。さらに高齢者や障害者向けのサービス、育児や家庭教育支援、さらには教員訓練までも図書館が引き受けている。第一章、第二章などを読み進むにつれ、日本の図書館のイメージとは全く異なることがわかった。すなわち、人々の要望やニーズに、図書館が対応するのではなく、図書館自体があらゆる情報の発信基地となり、人々がそこから自分の興味やニーズにあったサービスを選択して利用できるのである。したがって、人々は、図書館サービスから新たな興味や意欲をかきたてられ、さらに、それに対しても図書館がサービス支援をしていることである。序章の夢をかなえた人々の具体例を読むとそのことがより明確に理解できる。ゼロックスのコピー機の生みの親、チェスター・カールソンやパン・アメリカン航空の創始者、ジュアン・トリッペ、さらに歴

史家アーサー・シュレジンガー、作家のサマセット・モームも大いにその恩恵にあずかったとのことである。

地方の時代だと言われて久しい。聖隷事業の発祥の地、この三方原の台地に、将来、医療・福祉・教育、

さらに芸術をも含めた文化の情報発信基地、さらには、子供達の意欲や眠っている能力、才能を引き出すようなサービス支援がなされ、文字通り、未来を作る図書館が出来たらどんなに素晴らしいことかと、この本を読んでその願いを一層強くした次第である。

図書館の記憶

社会福祉学部教授 佐々木 敏明

図書館に出入りするようになったのは大学に入ってからである。田舎から出てきたばかりで背伸びしていた私は、大英博物館の図書館にテント生活をしながら通い、20代でベストセラーの『アウトサイダー』を書いたコリン・ウイルソンのような生活に憧れていた。当時は、書架から本を取り出してカバーの裏をみるとカードが入っており、貸し出した人の名前が書かれていた。尊敬する先生や、先輩の名前をみつけては片端から借りたものである。

1・2年生の頃は、福祉の専門書を借りた記憶はほとんどない。今は亡き友人に刺激されてサルトルとか、メルロー・ポンティとか、今読んでもわからない哲学書を借りては授業にも出ないで喫茶店で議論していた。マルクスやウェーバーもなんとなく時代の風が手に取らせ、読まなくともわかったような気分させてくれたのかもしれない。

3・4年生になると実習先の精神科医に「勉強しているね」といわれるのが嬉しくて精神分析やカール・ロジャーズなど、カウンセリング関係の本をよく借りた記憶がある。

大学時代の図書館は、先生や先輩が導いてくれる哲学者や社会学者と想像上の出会いの場所であり、友人との話題を見つける欠かせない場所だったのである。

卒業後、地方の病院にソーシャルワーカーとして就職した。母校の図書館には、時々、文献を探しに出向く程度であったが、卒業生として自由に閲覧させてもらえることに、何となく優越感をもった。

必要な本が見あたらないこともあって街の図書館からは、いつしか足が遠のき、書店や古書店が図書館代わりになった。東京で仕事をしているときも、埃だらけになりながら神田や早稲田の古書店街を巡ることが、なによりも気分転換になったのである。

いつの頃からか、新しい土地で生活をするとき、古書店、喫茶店をみつけ、それをキーとして地理を覚える癖がついていた。

ひょんなことから、大学の教員になり、図書館が身近な存在になったが、私の図書館に対するノスタルジアは見事に裏切られることになった。もともと新しい知見が勝負の自然科学系の大学で、しかも社会福祉が新しい学部であったため、絶版になっているような専門書や雑誌のバックナンバーは皆無に等しかった。もちろん、インターネットで世界中の図書館とつながり、必要な本や文献は、昔より容易に入手できるようになっているのだが、書架の間を歩いて探す楽しみ、本を手にとってばらばらとめくる楽しさが味わえなかったのである。

また、住宅事情もあるのであろうが、図書館の閲覧コーナーが学生の試験勉強の場所になっているのも幻滅した。私は昔、試験期間中は、図書館や書店には近寄らないようにしていた。読みたい本に出会ってしまうことが恐ろしかったからである。

図書館は、教えられることから、解放されて、学ぶことを体験できる場所である。「どんな本を読んだらいいのか教えてください」といわれても、読みたい本は、本を読まないで見つからない。学生時代は、教科

書をマスターすることも大事だが、図書館に通い、少し背伸びをして、本を手に取り、大学時代の思い出のなかに図書館の記憶を残してほしい。

私の中には、懐かしい図書館の記憶が一杯詰まっている。図書館と古書店と喫茶店がなかったら、今の私

はなかったであろう



沖縄暮しを偲ぶ

看護学部教授 伊藤 幸子

平成12年4月から15年3月までの丸3年間、沖縄県那覇市に生活の居を構えて一人暮らしをし、沖縄県立看護大学に勤務した。この大学の開設準備のため、生まれて初めて沖縄空港に降り立ったのは平成10年の秋ごろ？だったのだろうか。東京に生まれ、既に半世紀以上の長き歳月をその近県で生きた私だが、それまで、大きくもない日本国内の沖縄県と宮崎県にはまだ足を一歩も踏み入れたことがないと自認していた。それが、縁もゆかりも全くありそうにもなかった沖縄に出かけることになった時は、「とうとう沖縄に行ける！」「待てば海路の日和かな」と大いに感激した。私という人間は、未知なる世界に憧れて進んであちこち旅に出て行きたい人種ではないのだが、偶々その土地を訪ねることがあって、そこの空気を吸い、そこに暮す人々と出会ってみると、俄かにそこに親しみを感じ、いろいろ知ることが面白く楽しくなるらしい。つまり適応性に恵まれているようだ。沖縄暮しでそのことが実証されたかなと思う。

当時は、「お・き・な・わ」についてはほとんど何も知らない白紙状態。一つ、「♪海の青さに、空の青、南の風に、緑葉の芭蕉は…、わたした島、うちな〜♪」というきれいなメロディの曲を良く唄ったし、もう一つ、無条件降伏の日本敗戦の年の6月23日、本土の人々は知る由もなかったが、沖縄本島では敵軍に上陸され、激しい戦闘が繰り広げられた日本唯一の悲劇の島であること、「ひめゆりの塔」のことを然るべき年代の者なら誰でも知っていよう。そして、その遠い昔は琉球王国として栄え平和と独自の文化を謳歌し

た歴史をもつこと…ぐらいだった。

沖縄に迷い込んできたようなやまんちゅ（大和人）の私、何も知らないそして何でも珍しがる私を周りの方々はあちこちに案内して下さり、いろいろ教えてくださったことに厚く感謝したい。

まずは食べ物のこと。「ソーキそば」「沖縄そば」は蕎麦ではなくラーメンの黄色の麺に近い。塩味で煮込んだこりこりとしたコラーゲンそのものの軟骨付の豚肉がトッピングにのったソーキそば、甘い醤油味の豚角煮がのっている沖縄そば。わが人生で初めて那覇空港に降り立った時がお昼時で、立ち寄った大衆食堂でご馳走になったのがソーキそばであった。思わず深呼吸した空港の外気とまぶしい日の光を全身に浴びた瞬間に感じた金色のイメージと同時にいつも浮かび上がってくる沖縄の初の味である。沖縄で「てんぷら」といえば、さつまいも、それも紫色の紅芋を厚切りして衣をつけて揚げたものだが、揚げたてをお八つにいただく。その美味しさはご想像以上。有名な「さーたーあんだぎー」もてんぷらの一種に入る。ピンポン玉の大きさのものもあれば、野球ボール大の豪快なものもあるが、味はカステラ風だ。

先の「ソーキそば、沖縄そば」は分かったが、そのほかのメニューは「じゅーしー」「…ちゃんぷるー」「ひらやちー」…など、仮名が読めても何物か分からないのが殆どだった。このように沖縄のことばには独特のものがある。独特といえば、地名のこと。見ても聞いても、頭に浮かぶ漢字とは大違いというものが沢山ある。南風原（はえばる）、東風平（こちんだいら）、

今帰仁（なきじん）城址、古波蔵（こはぐら）…。那覇市内を車で走らせると、あちこちで読めない標識に戸惑う。我流で読んだ読み方で、道を人に訊ねて通じないこともしばしば。国外でもないのに、異国に迷い込んだような一寸した奇妙な感覚にクラクラすることも沖縄暮しの味わいであった。

12月～1月頃は早くも緋寒桜のお花見季節だが、桜吹雪ではなく椿のように花ごと落花する風情は染井吉野のお花見に慣れた大和人の眼には違和感が禁じえない。また、桜前線も沖縄本島の北の山原（やんばる）からスタートし本部（もとぶ）、那覇へと南下してくるのが不思議。

街路や学園、人家の庭々に咲く花木にも、半生をとくに過ぎた人間にとって初めて出会えたものが多々あり、でいご（沖縄県花）、かえんぼく、とっくりきわた、ほうおうぼくはいずれも大きい真紅の花をつける大木だ。かつて憧れのハワイで珍しさにわくわくして見つめたハイビスカス、ブーゲンビリアも花の色も数々あるうえに、垣根として、日除けとして全く日常的に咲いているのがふんだんに見られた。特筆すべきは5月になると大きな房状の花を咲かせる月桃（げっとう）で、沖縄に来て始めて見、いちばん気に入った多年草だが、沖縄の至る所に自生繁茂している植物のせい、人々の目に‘美しい花’との定評が全くあがらないのが腑に落ちないと思った。東京の花屋でならきつと高価なお値段で売れるはずなのに。月桃の葉は大きく、独特の芳香、防腐作用があり、清明祭にはこれでお餅を包んで蒸した供え物をよく作っている。牧野和漢草大図鑑を見ると薬用部分は種子で、芳香性健胃剤、香辛料に用いるとしか記載されていないが、葉っぱや茎が和紙、織布になり、抽出した精油が石鹸、染料、飲み物に用いられているなど、沖縄名産品が多種ある。アセロラのこともある。アセロラ果汁5パーセントの缶ジュースを愛飲したのは20年前にもなるが、アセロラがどんな果物か見たこともなく想像さえしていなかった。それが沖縄でこの花樹と果実の実物に出会えたことは感激だった。濃いピンク色した小さい4弁のかわいらしい花が咲く。棘をもつ低い藪木で小さい葉を茂らす。果実はさくらんぼ大で鈴

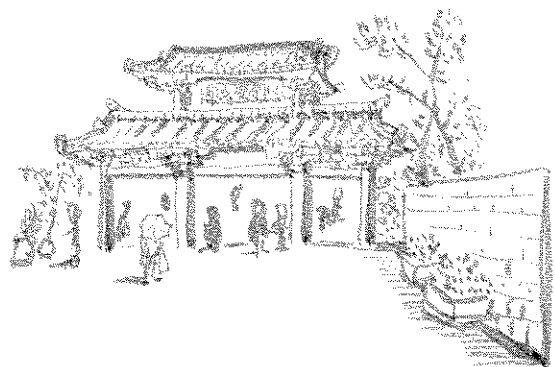
様の可愛らしい形、中味も果皮も真っ赤。苗木を買い求め、2年余、植木鉢で成長を眺めたが沖縄を去るにあたって、校庭の一角に移し植えてきた。アセロラもそうだが、パパイヤやグアバなどの木が庭に植わっている家が多いとのことである。

沖縄の自然環境には夏季の猛暑や台風という難物があるけれども、冬の季節になっても、早朝の起床にぐずぐずと躊躇うこともなく、水道水で洗顔したり水仕事するのに冷たさに身を縮こませることがないのは最高の幸せだった。数知れぬほどの愉しみや刺激を受けた沖縄、老後には、冬の季節になると沖縄に向う渡り鳥のように暮せたらと考えている。

まだまだ私の沖縄について書きたいが、最後に研究室の書棚にある書籍名を列記して筆をおく。

沖縄に関する私本（読者歓迎です）

- ていーあんだ 山本彩香の琉球料理 1998, 沖縄タイムス社
- 泡盛 1996, 沖縄県
- エイサー 1998, 沖縄県
- 名嘉正八郎著：図説沖縄の城（ぐすく）
—よみがえる中世の琉球— 1996, 那覇出版
- 大田昌秀監修：写真集沖縄戦 1990, 那覇出版社
- 人びとの暮らしと共に45年
—沖縄の駐在保健婦活動— 1999, 沖縄県
- Willcox, Willcox, & Suzuki : The Okinawa Program: How The World's Longest-Lived People Achieve Everlasting Health — and How You Can Too 2001, Potter



マックスウェルの悪魔

リハビリテーション学部助教授 多羅尾 範郎

人は何のために生きるのか？いや、どう生きるのが人間としての特徴を生かすことになるのだろうか？

初学者にとって、物理的には少し理解し難い「エントロピー増大の法則」をわかり易く解説した名著『マックスウェルの悪魔』（講談社ブルーバックス）の著者、都筑卓司先生も最近亡くなられた。

私がこの本に出会ったのは、既に統計力学や熱力学を学んで理解したつもりでいた大学生の頃であったが、今でも覚えているほど新鮮で印象深かったのは、次の2点によるのだろう。

1つはいわゆる物理の本とは全く違った説明方法で、情報理論のエントロピーとの比較を交えて説明していたこと。もう1つは「社会的エントロピー増大の話」が、現代社会を予想しているようで、いろいろと示唆に富んでいたことである。後者については、物理法則が直接社会科学にも適用できるためだけではなく、およそ、心に残ることは、「完全に明らかなことよりも7・8割は明らかで若干の神秘性を残していること」であることが関係しているのかもしれない。

話の都合上、私が今明確に覚えている大切な部分について、この本の簡単な紹介を兼ねて、議論させていただく。

青インクと赤インクが混ざると、それが分離される確率は宇宙の寿命よりも遥かに永い間待たなければ起こり得ないほど、殆どありえない事である。しかしながら、マックスウェルの悪魔である小人がいて、インクの微粒子を一つずつ分けていったらどうなるであろうか。もちろん、実際にそんなものが居る訳がないが、最近の科学技術では、類似の事が可能ではあるのだ。この場合、色の分離は可能で、したがってこの意味ではエントロピーは減少するが、この作業は、熱の発生を伴うため、分子の速度分布までを考えに入れば、トータルのエントロピーはやはり増大する。

著者が主張したい「この比喻」の社会科学的エントロピー？減少についても、私の学生時代の事や私の独断と偏見を含んだ表現で、少し触れてみよう。

私が大学1年生の頃は、本も今とは比べ物にならないほど手に入り難かった。量子力学の本においても、Shiffの量子力学のペーパーバック版(英文)があっただけで、当時の私には、「興味のある核融合に関する深い散乱問題」や「相対論的量子力学のDiracの方程式の作り方」の部分以外は正直に言ってさっぱりわからなく、本当に理解するには、私が3年生の頃になり、小出昭一郎の『量子力学Ⅰ・Ⅱ』が出版されるのを待たねばならなかった。今から考えてみると、あの頃が一般に情報が出回りはじめた初期だったと思う。その少し前、私が高校生の頃は、今と違って、市立の図書館などは全く無く、学校の図書館にも私が興味を持っていた天文の本などは殆ど無く、時々、友達と学校帰りに8 Km程歩いて渋谷の大盛堂まで行き、「ハタキと戦いながらの立ち読み」で読書をしていた。インターネット等でいくらでも情報が入る今の学生には多分想像がつかない事だろう。私は、今は情報過多の時代だと思う。これでは、何が大切な情報かは判断できず、選別などしようがない。

インターネットで情報過多になった現代において、読書がマックスウェルの悪魔に成り得るか否かは、これからの皆さんの読書に対する姿勢によるのだろう。読書は努力を払い積極的に働きかけて、皆さんの人生の足跡に一番近い情報源となり得ると思う。

現代の情報氾濫時代を予見して、30年前に書かれた名著『マックスウェルの悪魔』は、環境問題などに関心のある学生にも、「新鮮な視点」を得るのに推奨されるべきもので、また、「生命とはなにか？」という哲学的な関心のある学生にも、指針となる筈のものである。



図書館でのひととき

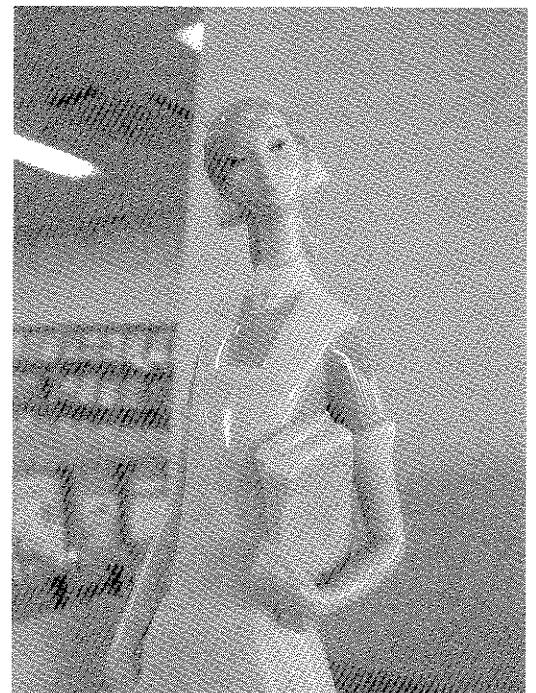
看護短期大学部講師 片山 京子

私自身が始めて図書館を利用したのは、記憶をさかのぼると小学生の頃であったと思います。その当時は、図書館には、図書検索カードが五十音順に整えられており、その中から自分の興味ある図書を探したものです。しかし、ここ数年のうちに、情報化社会は急速に発展し、今では『電子図書館』といった言葉まで耳にするようになりました。そして、この電子図書館によって、自分が読みたい文献や図書を簡単に入手し、読むことができるようになったのです。日々の技術の発展にただ驚くばかりです。電子図書館により便利にはなりましたが、私はやはり図書館に足を運びその中で自分の興味や関心のある図書や文献を探し求めるそんなひと時がとても好きです。

従来は、書棚に整然と並んでいる図書の背表紙を眺め、不思議な躍動感を味わいながら、何かに吸い込まれるかのように自分の興味を引く本を手に入れるのです。そして、その本は、新しい世界へと導いてくれます。書棚に並んでいる図書の数だけの新しい世界があるといえるのではないのでしょうか。

何となく図書館を訪れたある日のこと、書棚の本の背表紙を見ながら歩いていると、ふと足が止まる本に出会いました。思わずその本を手にとり目次に目を通してみると、そこには、宝の山とでも言うかのように、興味を引く内容の文献がいくつも存在していました。図書館の椅子に腰掛け、その一つ一つに目を通してみるとそこには新しい発見が沢山あり、思わず時間も忘れて夢中でその文献を読んでいたのです。その時間は、自分がこれまで知りえなかった新しい知識で満たされ、何ともいえない充実感を味わっていました。またある日には、衝撃を受ける内容の文献に出会ったのでした。一通り目を通しましたが、その後その時の文献についてはしばらく記憶から遠のいていました。しかし、ある時、以前に目を通したその文献の内容の一部がどうしても頭の片隅から離れずに残っていることに気づいたのです。そこで、図書館でその文献を無我夢中で探したところ、再度探し当てることができまし

た。偶然にも探し当てたその文献に再度出会えた喜びは何とも言い難いものでした。これまで、図書館に幾度となく足を運びましたが、一つの文献に出会える喜びがこんなにも大きなものであるということに初めて気づいたと言えるかもしれません。図書館は貴重な時間を与えてくれるばかりではなく、その日一日を何ともいえない充実感で満たしてくれるものなのです。情報化社会の中で、次第に本を読む機会が失われつつある今日、もう一度、身近にある図書館を見直し、一歩足を踏み入れてはいかががでしょうか。きっと、今まで自分が知らなかった新しい世界へと導いてくれると同時に、一日の中でも充実したひとときを過ごすことができるのではないのでしょうか。今回、図書館でのひとときを振り返ることで、私自身も図書館の不思議な魅力を再確認できた気がします。



所蔵文献目録

* 最近発行された地域看護、地域福祉、地域作業療法に関する図書です。以下に紹介された図書は大学図書館で所蔵しています。(請求記号、『書名』、著者等出版社)

- N900 『地域の健康課題と地域看護学』(最新保健学講座1) 金川克子編, メヂカルフレンド社
 N900 『地域診断と保健福祉対策』(最新保健学講座2) 平野かよ子編, メヂカルフレンド社
 N900 『地域看護支援技術』(最新保健学講座3) 村嶋幸代編, メヂカルフレンド社
 N900 『ライフステージの特性と保健活動』(最新保健学講座4) 金川克子編, メヂカルフレンド社
 N900 『心身の健康問題と保健活動』(最新保健学講座5) 金川克子編, メヂカルフレンド社
 N900 『ヘンリー・ストリートの家: リリアン・ウォルド~地域看護の母~自伝』
 リリアン・ウォルド著; 阿部里美訳, 日本看護協会出版会
 S000 『健康・生活問題と地域福祉: 暮らしの場の共通課題を求めて』 高林秀明著, 本の泉社
 S700 『社会資源と地域福祉システム』 小坂田稔著, 明文書房
 S700 『よくわかる地域福祉』 上野谷加代子, 松端克文, 山縣文治編, ミネルヴァ書房
 M478 『「地域作業療法学」(作業療法学全書)』 寺山久美子編集, 協同医書出版社
 S260 『地域理学療法』 伊藤日出男, 香川幸次郎 著, 牧田光代編集 医歯薬出版
 M250 『地域理学療法学』(Standard textbook 標準理学療法学専門分野) 牧田光代編集, 医学書院

利用頻度統計

1. 貸出上位にある図書(対象期間: 2004年4月1日~2005年2月28日)

学部学生編(順位/『書名』/著者等)

- | | | |
|----|------------------------------------|----------------|
| 1位 | 『小児看護』(看護必携シリーズ10) | 水原春郎[ほか]監修 |
| 2位 | 『老人患者の日常生活への援助』第2巻 | 大山好子編集 |
| 2位 | 『標準看護計画』第3巻 | 香川医科大学医学部附属病院編 |
| 4位 | 『基礎看護技術2』第4版 | 氏家幸子著 阿曾洋子著 |
| 5位 | 『侵襲的検査とその看護: 生体に対する侵襲を伴う検査を安全・安楽に』 | 山本幸江編集 |
| 5位 | 『呼吸器系疾患をもつ人への看護』 | 奥宮暁子著 |
| 7位 | 『血液・造血器疾患看護マニュアル』(ナーシング・マニュアル9) | 廣田豊責任編集 |
| 7位 | 『肝・胆・膵2』(ナーシング・マニュアル7) | 杉田輝也責任編集 |
| 9位 | 『呼吸器疾患』(Nursing selection 1) | 木村謙太郎 松尾ミヨ子監修 |
| 9位 | 『基礎看護技術マニュアル』 | 河合千恵子責任編集 |
| 9位 | 『妊娠・分娩1』(母性看護学1) | 東野多恵子[ほか]編著 |
| 9位 | 『消化管疾患』(看護のための最新医学講座4) | 千葉勉編集 |
| 9位 | 『検査値早わかりガイド: 数値の意味と看護のポイントが一目でわかる』 | 江口正信[ほか]著 |
| 9位 | 『消化器疾患』(Nursing selection 2) | 飯野四郎監修 |
| 9位 | 『看護技術の実際2』第2版 | 坪井良子編 |

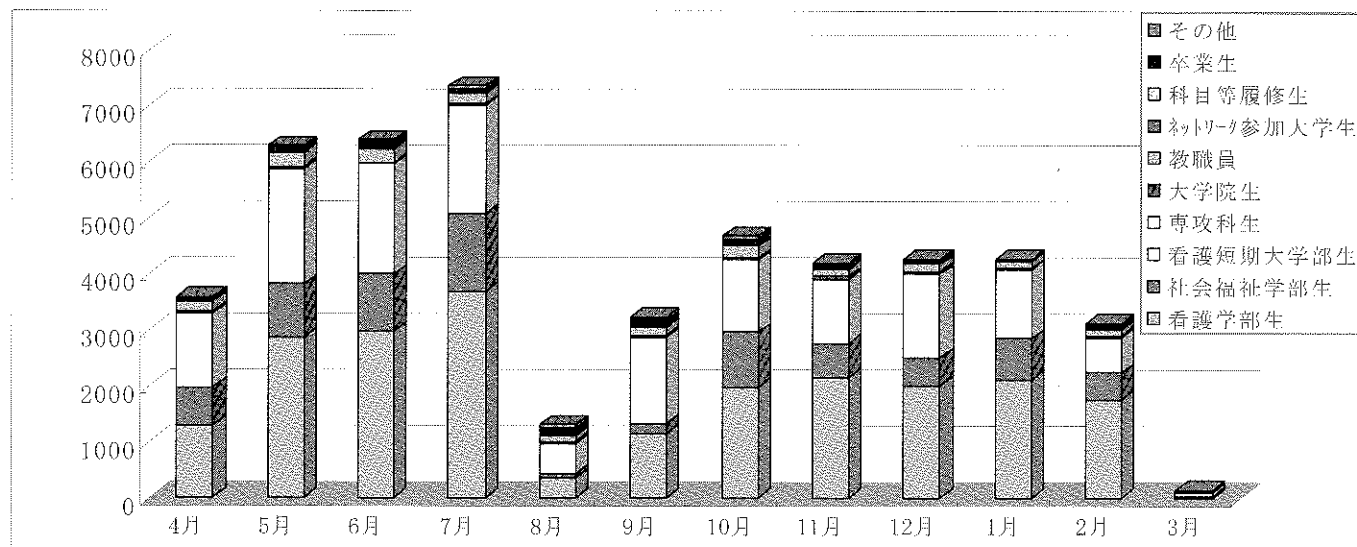
大学院生編(順位/『書名』/著者等)

- | | | |
|----|-------------------------------------|------------|
| 1位 | 『母性看護学(TACSシリーズ9)』 | 中西睦子監修 |
| 1位 | 『現代の若い母親たち: 夫 子ども 生活 仕事 生活意識データブック』 | 山本真理子編著 |
| 1位 | 『ナースのための質的研究入門: 研究方法から論文作成まで』 | イミー・ホロウェイ著 |
| 1位 | 『家族生活力量モデル: アセスメントスケールの活用法』 | 家族ケア研究会編著 |
| 1位 | 『障害者のための福祉2003』 | 障害者福祉研究会編集 |

科目等履修生編(順位/『書名』/著者等)

- | | | |
|----|-------------------------------|--------|
| 1位 | 『息子61歳。仕事しながらボケた母を介助する。』 | 吉沢勲著 |
| 2位 | 『「寝たきり老人」のいる国いない国: 真の豊かさへの挑戦』 | 大熊由紀子著 |

2. 大学図書館入館者の月別、所属別の割合



教職員寄贈図書

2004年4月～2005年2月までに寄贈された図書

深瀬須加子 (学長) 『低肺機能患者の在宅療法』(木村謙太郎、深瀬須加子編集)

小川 恵子 (リハビリテーション学部長) 『高齢期作業療法学』(松房利憲、小川恵子編集)

平野美津子 (リハビリテーション学部) 『日本語講座 第2巻～第6巻』(大修館書店)

小松 源助 (社会福祉学部) 『創ること 譲ること 探ること…社会福祉を拓く途』(小松源助ほか著)

石井 正春 (社会福祉学部) 『情緒障害児のアセスメントと臨床・教育心理学的研究』(石井正春著)

河内 正弘 (就職センター長・学生サービスセンター長) 『ケアワーカーの教育研究体系』(河内正弘著)

(敬称略)

ほか、外部団体等よりたくさんの寄贈を受けました。ありがとうございました。

◆◆◆ お知らせ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

◇図書館のホームページのトップにはその時々で皆さんにお知らせしたいことなどを掲載していますので、ぜひご覧ください。

◇4月から第二図書館の開館時間が延長されます。平日は8:30から21:00まで利用できます。土曜日は8:30から17:00までです。貸出やレファレンスは9:00から17:30までです。

図書館報 第3号/発行・聖隷クリストファー大学図書館/2005年3月1日

〒433-8558 静岡県浜松市三方原町 3453/TEL: 053-439-1416/FAX: 053-414-1146

E-mail: cl-library@admin.seirei.ac.jp URL: http://collib.seirei.ac.jp/